

審判及び試合規定

一 共通規定

(意義)

本規定は審判の厳正統一、権威の確立、並びに試合出場者の安全性の保持のために規定されるもので、東洋武道連盟・琉球少林流月心会全国空手道選手権大会の試合に適用する。

(審判長及び審判監査の決定)

審判長及び審判監査は、宗家または主管本部長が決定する。

(審判員の中立性と公平性の確保「禁止事項」)

・審判審議内容は試合コート内で共有されるが、それを公表してはならない。

・審判員は試合前後に選手に技の指導をしてはならない。行う場合は、宗家に申し出ること。

・審判員は試合中に選手の応援をしてはならない。

(審判員の着衣)

審判員は、上は白道着、下は黒袴を着用する。

(異議の申立)

審判員の宣告に対して選手からの異議の申立ては認めない。異議がある場合は、本部長または支部長を通じて審判長に申し立てができる。

(審判監査の権限)

審判監査は、主審及び副審の判定が正しくないと判断した場合、大会会長、大会委員長、及び審判長に理由を説明して再試合を具申できる。

(規定外の事柄)

審判執行について、本規定に定められていない事項に関しては、審判長と合議の上、大会会長に報告して対処すること。

(改定)

本規定書を変更する場合は、宗家の許可を必要とする。

二、二 型試合規定

(審判構成)

- ①主審一名、副審二名または四名で構成する。
- ②審判の持点については、主審一点、副審各一点とする。

(試合の開始)

各選手は呼び出されてそれぞれ紅白の開始位置に立ち正面を向き、主審の「始め」の合図により、各自演武する「型の名称」を発声し型を開始する。

(試合の終了)

各選手は各自の演武終了後、主審の判定を待ち、判定後は速やかに元の場所に戻る。

相手の型が終わるまで時間が掛かる場合は着座して待つこと。

(指定型及び自由型)

指定型及び自由型は大会プログラムに掲載すること。

(判定基準)

- ①技の正確さ
- ②スピード(速さと緩急)
- ③力強さ
- ④気合
- ⑤優美性

東洋武道連盟琉球少林流空手道月心会「審判及び試合規定」に準拠し、その一部及び今大会の規定(指定型・自由型・同点の場合の対処法、組手の試合時間・延長戦の実施基準)を以下に掲載する。

二 型試合審判・試合規定

二、一 型試合審判規定

(審判員の位置)

主審は、試合コート内で選手の後方から正面に向かって立つこと。副審は、試合コート正面外で試合コートに向かって一列に並ぶこと。

(副審の権限と判定)

- ①選手に型の間違いがあった場合、若しくは間違いのおそれがあると判断した場合は、判定前に主審に申告すること。
- ②副審は、紅白の旗を携行し、主審の「判定」の合図により、紅白どちらかの旗を真上に上げる。

(主審の権限と判定)

- ①選手に型の間違いがあった場合、若しくは間違いのおそれがあると判断した場合、副審から申告があった場合は、副審からの意見聴取及び協議、勝敗の決定をすることが出来る。
 - ②副審の紅白の旗数を数え、旗の数が多い方を勝ちとする。旗数が同数の場合は、原則として予選時は主審判定、決勝時は再試合となる。
- 再試合の場合の型の選択や再試合の回数など詳細は大会プログラムに掲載すること。

■今大会の指定型・自由型

クラス	1回戦 (★1回戦・2回戦)	ベスト8 選出まで	準々決勝 決勝戦
幼児	少林竜の型	少林竜の型	自由型
小学1〜3年	少林竜の型	アーナンクー	自由型
小学4〜6年	少林竜の型	Iの型	自由型
中学生以上	アーナンクー	ワンスウ	自由型
親子型級	少林竜の型	アーナンクー	自由型
親子型段	アーナンクー	ワンスウ	自由型

★1回戦または2回戦を終わってベスト8選出される場合、1回戦に1・2回戦の指定型、2回戦にベスト8選出までの指定型を指定する場合があります。

◎琉球少林流の型のみとする。(但し、少林竜の型、Iの型を含む、松村ナイファンチは不可)

◎級の選手は五十四歩まで、段の選手はパッサイまでとする。但し、段の部は一般段男子の決勝戦のみクワサンクーを可とする。

◎親子型は申込時点で一人が級の場合は五十四歩までとする。

◎型決勝で副審同点の場合、主審の判断により別の型で再戦する。

さらに同点の場合は主審が判定する。
◎一般男子段は再戦、再々戦の場合はそれぞれ別の型とする。同点の場合、主審が判定する。

※クラス別の指定型・自由型は次ページを参照

三 個人組手試合審判・試合規定

三、一 個人組手試合審判規定

(事故防止)

審判団は選手の人命人格を尊重し、事故防止に努め安全で健全な試合運用を行うこと。事故防止には事故を未然に防ぐように審判注意や反則判断などは的確かつ厳正に行うこと。

(審判員の位置)

主審は、試合コート内に立ち、位置は自由とする。但し、試合の開始終了、宣告(勝敗判定、一本、技あり、場外、反則)時は、正面を向いて試合コートの中央より後方に立つこと。

副審は、四名の場合、試合コートの四隅の椅子に着座し、二名の場合、試合コートの前方二隅の椅子に着座すること。

(副審の権限)

副審は、紅白の旗を携行し、判定に対する意思表示(勝敗判定、一本、技あり、相打ち、場外、反則、中立不明、認めない)を行う。

尚、判定は目視現認主義とし打突に関して見えない場合は中立不明の意思表示を行うこと。

また、主審を補佐し、一本、技あり、反則に対する意見を具申すること。

(主審の権限)

試合進行の主導権を持ち、宣告(勝敗判定、一本、技あり、場外、反則)及び必要に応じてその根拠の解明、注意事項の告示、その他一切の処置権限(退場、休止など)、副審よりの意見聴取及び協議、勝敗の決定権、延長の宣告権を保有する。

尚、副審一名が意思表示しても主審の判断で試合を続行することができるが、主審二点、副審各一点の判定点を持つため副審二名以上が判定に対する意思表示を行った場合は必ず副審と協議するか副審の意思表示を判定に反映させること。

但し、副審二名構成の場合の主審の持点は一点のため、副審二名の判定に対する意思表示を判定に反映させること。

(場外)

①場外とは両方の足が線外に出た場合をいう。

②場内より場外の相手への攻撃は、有効であってもこれを認めない。

③打ち合いにより場外に出た場合は、場外を認めず主審は試合を中断して開始位置に戻し、試合を再開させる。

(試合コート)

原則として試合コートは、十メートル四方または八メートル四方、開始線は一メートル、間隔は三メートルとするが試合会場や試合運用の都合上、大会委員長が宗家に許可を得て変更できる。

(試合時間の計測)

試合時間の計測は、主審の「勝負始め」または「始め」の合図で開始し、主審の「時間止め」の合図または、時間終了まで継続測定すること。

(選手の服装)

①空手着の上に、指定の防具を着用すること。

②手足の爪は適度に短く切ること。

三、三 個人組手試合規定(細則)

(審判構成)

①主審一名、副審二名または四名で構成する。

②審判の持点については、主審二点、副審各一点とする。但し、副審二名構成の場合の主審の持点は一点とする。

(基本ルール)

①防具付き組手

大会では、組手の危険性を排除し、指定の防具(面、胴、グローブ、足サポータ)着用とすること。

(副審の判定)

試合時間が終了して、技ありの数が同数の場合、主審の「判定」の合図により、紅白どちらかの旗を真上に上げるか引き分けの動作を行う。

但し、予選の場合は、原則として紅白どちらかの旗を真上に上げること。(主審の判定)

副審の紅白及び引き分けの旗数を数え、旗の数が多い方を勝ちとするか、延長戦を宣告する。

同数の場合は、原則として予選時は主審判定、決勝時は延長戦となる。延長戦及び再延長を行う基準は大会プログラムに掲載すること。

三、二 個人組手試合規定

(試合の開始)

選手は呼び出されてそれぞれ紅白の開始位置に立ち相手を見て試合終了まで相手から目を外さず、主審は両者の気が満ちた時に宣告する「勝負始め」または「始め」の合図により、試合を開始する。

(試合の終了)

選手は「止め、開始位置に戻って」の宣告で開始位置に戻り、主審の判定後は速やかに元の場所に戻る。

(主審の指示)

選手は主審の「待て」「止め」「場外」「中央」「続けて」の合図に従い試合を行うこと。

(試合の中断)

主審は以下の理由で試合中断が適当と判断した場合、「止め、開始位置に戻って」と宣告して一旦試合を中断することができる。

尚、選手の判断や副審の意思表示による中断は行わず、主審の指示に従うこと。

①副審が意思表示していない場合で、主審判断により宣告(一本、技あり、場外、反則)する場合

②副審が意思表示していない場合で、副審の意見を聴取したい場合

③副審より意見の具申があった場合

④接近組み打ち動作がこう着状態になった場合

⑤場外の場合

②攻撃範囲と攻撃方法

・有効箇所は、上段は面の正面と側頭部、中段は胴の防具部分、下段は大腿部とする。

・幼児・小学生・中学生の部、女子の部の技は中段のみに限る。

・上段ラセンは、高校・一般男子のみ可とする。

・ローキックは、高校・一般・壮年・シニア(シニア、ミッドシニア、グランドシニアを含む。以下、同じ)男子のみ可とする。

・上段、中段振り拳・フック(横突き)は、高校・一般・壮年男子のみ可とする。

・中段膝蹴りは、一般男子のみ可とする。

③試合時間

大会プログラムに掲載すること。

■今大会の試合時間

クラス	試合区分	試合時間	延長
中学生・高校生	予選	1分30秒	原則無し★1
一般・壮年	決勝	1分30秒	1分(先取り)
幼児・小学生	予選	1分	原則無し★1
シニア(ミッドシニア グランドシニアを含む)	決勝	1分	30秒(先取り)
団体組手★2	予選・決勝	1分	無し★2

★1：主審または審判団の判断で、判定による決定がどうしても困難な場合のみ、延長30秒を認める。但し、延長戦後の判定では、副審は必ず紅白どちらかの旗を上げ主審が勝負判定を行い、再延長は行わない。

★2：団体組手においては、技ありのポイントが同数の場合は旗判定を行わずに引き分けをありとする。

但し、3試合の結果引き分けの場合、ポイントの多いチームを勝ちとする。同ポイントで引き分けの場合は、大将戦での勝者決定を行う。引き分けの場合は先取りによる延長を行う。

※前ページから続く

三、三 個人組手試合規定(細則)

(体重別クラス分け基準)

一般男子段の部の場合は、道着を着て六七・〇キ以下を軽量級、六七・一キ以上を重量級とする。計量で軽量級の選手が六七・一キ以上の場合は失格とする。

- ①計量は、試合に出場する自分の道着に帯をつけて行うこと。
 - ②計量は、開会式直前または直後に行い、計量オーバーした場合は午前中に再計量できる。尚、計量時刻は事前に通知する。
 - ③計量は、審判長または、審判長が指名した数名で厳正に行い失格基準に例外を設けない。
- 但し、軽量級の計量オーバー者で重量級に出場したい選手は、重量級トーナメントの空き枠に参加することができる。(大会事務局は一般男子段の重量級トーナメントに空き枠を用意すること。)
- ④計量では、信頼性の高い体重計を使用すること。尚、最少表示百グラムの体重計でTANITA製を推奨する。

(判定基準)

- ①有効技
「突き」「打」「蹴り」の正確有効かつ威力ある攻撃が次の状態でなされた時に認める。
・基本的正しい姿勢で攻撃、反撃時の適正なる間合いの保持。
・残心、充実せる気力と正確な目標の把握。
・その他の確なる有効攻撃を認めた時。
- ②一本
反則技ではなく、有効技が入り相手がダウンまたは戦闘不能になった時。
③技あり
捌かれずに、有効技が急所(面、胴の有効箇所)に入った場合で、相手が戦闘不能にならなかった場合、技ありとする。
技が入っても、あまりに軽いと判断した場合は技ありと認めず、判定時の参考とする。
- ・足払いで相手を倒した突き(寸止め)の残心があった場合「技あり」とする。足払いは足の裏で払った場合に有効とする。

(試合判定)

- ①試合の時間内に「突き」「打」「蹴り」の的確な有効攻撃を「一本」または、「技あり」とし、「一本」の先取者を勝ちとする。(技あり二本をも以て一本とする)一本の場合、制限時間であっても一本勝ちとし、試合時間切れの場合は、「技あり」を取っているものを勝ちとする。尚、延長戦の場合は先に有効技を取ったものを勝ちとする。
- ②延長戦の場合の「反則」カウントは本戦の「反則」回数に加算する。但し、延長戦で判定がつかない場合「反則」は一回でも判定の材料とする。
- ③延長戦の場合の「場外」カウントは本戦の「場外」回数に加算する。但し、延長戦で判定がつかない場合「場外」は二回でも判定の材料とする。
- ④技ありの数が同数の場合は判定を行う、副審は紅白の旗で引き分けを含む判定を行う。
反則、場外の有無
・試合中の態度や戦術の優劣
・技の巧拙、手数と気魄戦意の有無
- ⑤選手が負傷の場合
試合中、負傷のため試合続行が不能になったとき審判員は協議の上次の通り判定する。
・その原因が明らかに負傷者自身にある場合は、負傷者の負けとする。
・その原因が明らかに相手側にある場合は、負傷者の勝ちとする。
・その原因が何れの責任とも認められない場合は、引き分けまたは負傷者の負けとする。
- ⑥主審の宣告後及び時間切れと同時の攻撃は有効であってもこれを認めない。

(失格)

- 次の理由で失格になった場合は相手の勝ちとする。
- ・試合中に審判員の指示に従わない時
 - ・反則が故意による場合、反則が悪質な場合や反則が報復行為と見なされる場合
 - ・粗暴な振る舞い、悪質な試合態度と見なされた場合
 - ・人道に反する言動をした場合

- ・「場外」三回の場合、相手方に「技あり」を与える。
- ・「反則」二回の場合、相手方に「技あり」を与える。
- 尚、「反則」三回で相手の勝ちとなる。

④反則技

- ・攻撃範囲以外を攻撃した場合、但しローキックの場合は、同じ場所に続けて三回攻撃した場合、インローを攻撃した場合、高校・一般・壮年・シニア男子以外がローキック攻撃した場合、膝関節及び膝より下を攻撃した場合。
- ・有効箇所以外の面の後頭部、背中に攻撃を行った場合。
- ・「踵落とし」「胴廻し回転蹴り」を行った場合。
- ・「振り拳・フック(横突き)」は高校・一般・壮年・シニア男子のみ上段中段の攻撃を可とするが、連続攻撃を行った場合。
- ・転倒した相手に攻撃を行った場合。
- ・足払いを内踝(くるぶし)や足の甲で行った場合。
- ・肘打ち攻撃。
- ・投げ技および間接技。
- ・相手を掴みこんで膝蹴りを行った場合。(一般男子のみ中段への膝蹴りを可とする。)

⑤反則行為

- ・戦意を喪失し、相手に背を向けた場合。
- ・執拗にまたは故意に有効範囲以外に攻撃をした場合。
- ・高校・一般・壮年・シニア男子以外の試合(上段攻撃のない試合)で、中段をガードしたまま試合を続けた場合。
- ・相撲行為、タックル、頭突きや頭から相手に突っ込むなどの危険と判断される行為をした場合。
- ・その反則行為に対する捌き、いなし(片手掌底で一瞬に引掛ける)により相手が倒れた場合は、投げ技としての反則とならない。
- ・時間を空費する行為をした場合。
- ・面、胴着を掴んで攻撃した場合。
- ・主審の「止め」の合図にかかわらず攻撃した場合。
- ・罵倒及び挑発的言動や、相手の人格を無視するような言動をした場合。
- ・審判の判定や制止に従わない場合。

⑥場外

- 相手の技を避けるため、或るいは後退により、自ら試合コート内より出た場合。

(棄権)

- 次の理由で棄権になった場合は相手の勝ちとする。
- ・出場呼び出しを二回以上受けて出場しない場合
 - ・怪我や戦意喪失が見受けられて、主審の確認に対して自ら棄権を申し出た場合

四 団体組手試合審判・試合規定

以下に記載のない事項は、個人組手試合審判・試合規定を適用する。

- 四、一 団体組手試合審判規定
- 四、二 団体組手試合規定
- 四、三 団体組手試合規定(細則)

(試合判定)

副審による旗判定及び延長戦は行わず引き分け判定をありとする。

(選手構成)

- ①選手は男女ともに高校生以上とし、原則選手三名と補欠一名をエントリーする。但し、補欠はいなくても良い。
- ②選手は複数チームに出場できない。
- ③選手は同一地区本部または同一支部で編成し他地区本部の選手の出場は認めない。
- ④同一地区本部または同一支部で欠場者が出た場合の選手変更は、審判長の許可を得てできる。

(攻撃範囲と反則技)

- ・男子の場合は、高校・一般男子の部の規定を採用する。
- ・女子の場合は、女子の部の規定を採用する。

(選手の出場順)

試合前に選手の出場順(先鋒・中堅・大将)を主審に手渡し、その順に試合を行う。

(試合判定)

- ・引き分けをありとする。
- ・全員のポイントの多い方を勝ちとする。(一本は二点、技ありは一点)
- ・同点の場合は、代表戦を行い代表戦のみ延長戦がある。代表戦の出場者は本戦後に決定して良い。この場合、技あり(含む一本)先取、若しくは判定により勝敗を決定する。

以上

[参考]

防具種類			
面(上段有りのクラス)			
	スーパーセーフ面【Winning社】	Kプロテクターヘッドガード (HGKP3)※1	スーパー面(GSG)※1
	面(上段無しのクラス)		
パーフェクトヘッドガード (HG15)※1		パーフェクトヘッドガード 金網面 (HG17)※1	ミズノ社製 メンホー
胴			
	軽量ボディプロテクター (BP40)※1	K-ボディプロテクター (BPKP)※1	
グローブ			
	パンチンググローブII (PR02)※1	リストベルトパンチンググローブ (PG40)※1	

※1 【MW社】:マーシャルワールド社製

月心会組手試合 防具規定

(目的)

第一条 琉球少林流空手道月心会審判及び試合規定に従い、組手の危険性を排除するためにこの規定を定める。

(防具)

第二条

①別表に定めるものを月心会が標準とする防具とする。

②組手試合で同等のものを使用を妨げないが、新規に購入の際は、原則別表に定める防具を選択するものとする。

③別表に定める防具は、月心会として一定レベルの安全性があると判断したものであるが、月心会が安全性を保証したものであるのではない。許容範囲の防具の中で、体型等に応じ、各人が適切な防具を選択すること。

(改廃)

第三条

①本規定および別表の改廃は、本部長等からの提案により宗家が決定する。

②本規定は、安全性を考慮し、定期的に見直すものとする。

附則

第一条

この規定は、平成29年8月21日に施行する。

[別表]

	防具種類	防具内容	色
上段有りのクラス	面	・スーパーセーフ面【Winning社】 ・Kプロテクターヘッドガード(HGKP3)※1 ・スーパー面(GSG)※1	白または黒
	胴	・K-ボディプロテクター(BPKP)【MW社】※2 (自己の責任において安全な防具の使用は、例外として、認める。)	青※2
上段無しのクラス	面	・パーフェクトヘッドガード (HG15)※1 ・パーフェクトヘッドガード 金網面(HG17)※1 ・(上段有りクラスの)スーパーセーフ系面 ・ミズノ社製 メンホー	白または黒
	胴	【小学生】 ・軽量ボディプロテクター (BP40)※1 ・K-ボディプロテクター(BPKP)※1 【中学生・女子】 ・K-ボディプロテクター(BPKP)※1 (自己の責任において安全な防具の使用は、例外として、認める。)	白または黒 青※2 青※2
共通	グローブ	パンチンググローブまたはボクシンググローブ 【パンチンググローブの場合】 ・パンチンググローブII (PR02) ・リストベルトパンチンググローブ(PG40)※1 【ボクシンググローブの場合】 (ボクシンググローブを推奨防具としないが、当面、8オンス以内のグローブの使用を妨げない。)	白または黒
	足サポータ	全員の着用を必須とする ・メーカー・品名は不問	白または黒
	ファールカップ	【小学2年以下】 男子着用推奨 【小学3年以上】 男子着用必須 ・メーカー・品名は不問	不問

※1 【MW社】:マーシャルワールド社製 ※2 青・赤リーパーシブルの青面使用

組手試合での一本・技あり基準

中段突き 	中段廻し蹴り 	中段前蹴り 	中段足刀蹴り 
上段突き  高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	上段廻し蹴り  高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	上段前蹴り  高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	上段足刀蹴り  高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止
上段・中段後ろ蹴り  上段は高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	上段・中段後ろ廻し蹴り  上段は高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	上段・中段らせん  上段は高校・一般・壮年・シニア男子以外は禁止	

組手試合での反則基準

倒れた相手への攻撃 	道着を掴んでの攻撃 	背後からの攻撃 
金的・インローへの攻撃 	肘打ち 	膝関節・膝下への攻撃 

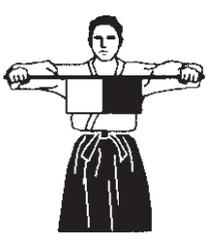
その他の主な反則

- ◎ 審判員の制止に従わない場合。
- ◎ 高校・一般・壮年・シニア男子で同じ場所に3回以上のローキック攻撃
- ◎ 幼児・小学生・中学生・女子の上段攻撃およびローキック攻撃 ◎ 胴廻し回転蹴り・踵落とし
- ◎ 幼児・小学生・中学生・高校・女子の膝蹴り

組手試合での主審動作基準

一本勝ち・優勢勝ち  勝った選手方のこぶし（甲を下にして）を上あげる。	技あり  技ありを取った選手方の手を斜め下に出す。（甲を上にして）	引き分け  両手を前でクロスする。
相打ち  両手のこぶしを前で合わせる。	反則・場外  反則及び場外をした選手を指差し、指で回数を示す。	何事も認めずの場合  手の甲を外にして両手を左右に振る。

組手試合での副審動作基準

一本勝ち・優勢勝ち  赤または白の旗を上あげる。	技あり  赤または白の旗を真横にあげる。	引き分け  両旗を交差して前下に出す。	相打ち  両旗の先をあわせる。
反則  赤または白の旗を上で回す。	場外  出た方の選手の旗（赤または白）を斜め下に差し出す。	何事も認めずの場合  両旗を交差させて振る。	中立・不明の判定表示  両旗を真下に出す。